"Laboro Kaj Emancipo"
Eldonas: Grupo "Laboro Kaj Emancipo"
Ĉe Y. TAKASHIMA
4—39, Nadakitadōri, Nadaku
KOBE, Japanio

Laboro kaj Emancipo ····
労働と解放

発行所　労働と解放社
神戸市灘区灘北通四ノ三九（高島）方
発行者　平沢貞太郎
編集者　高島洋
定価 20円

ベトナム反戦と労働者

昨年の10・21闘争は、はじめての反戦ストと言われたが、少なくとも自治労の実態はどうであったか。勿論、ベトナム戦争反対の旗印はかかげたが、同時に、人事院勧告完全実施要求のスローガンもあげての闘いであった。その理由は、反戦だけではストが打てないと言うものであり、実際は賃上げの方が主役になってしまった。そしてストの方も、せいぜい三〇分くらいが関の山で、大半の組合は勤務時間にくい込む前に中止したのである。そして今年は一層後退し、ストは10・26の賃上げストにずらし、10・21行動にはまたまた人事院勧告云々をならべたてるあさましさである。自治労の腰の弱さは、公労協とちがってホワイト・カラーが多く、それだけに組合の主導権を握っているところからくるのであるが、それにしても"反戦"闘争に対する余りにも無思想ぶりをさらけだしていると言うべきである。勿論、これは自治労ばかりでなく、総評等にも言えることであり、日本の労働組合の実体を示しているのである。

目を転じて、アメリカにおける10・21実力行使を見ると、国防省に乗り込み、国旗を焼き徴兵令書を燃やし等々、いかにマスコミがごま化そうとしてもかくしきれない人民のエネルギー＝戦争に対する憎しみがギラギラとたぎって迫ってくるではないか。かの大戦に於ける日本人民と比べるとき、単に人間歴史の乏しさだと言って、己れの責任をのがれることの出来ないものがある。

さて、このような状態で、来るべき七〇年闘争をどのようにしてやりぬくと言うのだろうか。10・8羽田に対して、やれはね上がりだ、敵のちょうはつに乗ったの、いたずらに敵の警備力を高めさせただけだのと、寝言のようなことを言ってごまかし、佐藤のベトナム行き阻止に一指も動かそうとしなかった組合、その指令が無かったからと、他人事のような顔でおさまっている労働者が、一体何をどのようにやるのか、何がやれるのか!!

反戦はイデオロギーの枠の中できめられるものでもなければ、労働者だけのものでもない。しかし、未来への変革者として立たされている労働者の真実は、反戦＝抗戦という闘いの中でこそ、その自信と誇りを知ることが出来るにちがいないし、また、組合が尻ごみするならば、そんな殻は破り捨てて、一個の労働者としての自分に向って、ドスをつきつけねばならない。現代に生きている証しとしても。

（Z・S生）

新明和へデモ

十月二十日米軍用機の修理を行なっている尼中市の新明和工業伊丹工場に向けてデモを行なった。当日、労働と解放社高島らは神戸行動委に参加、午後四時三十分ごろ阪急蛍ケ池に下車し、同工場に向う途中大阪行動委と合流し総勢七〇名程度となった。

午後五時ごろ同工場通用門に到着したが、そこには五〇名ぐらいの私服警官が待機し、工場内にも制服警官がいるなどその大ゲサな警戒ぶりにおどろかされた。ベトナム反戦の立場から抗議するため会社幹部への面接を要求したが保安係は門を閉じたまま応ぜず、折から退社時刻となって、ぽつぽつ従業員が外に出はじめるや保安係は全員を集会所に誘導、自から従業員を缶詰にした。（門が一つよりなかったため）われわれデモ隊は従業員に向って「ビラを渡すために来たのだからビラをもって早くかえって下さい」と叫んでも効果なく、七時ごろになってわれわれデモ隊が引揚げるまで会社は従業員を缶詰にしたままであった。

それにしても会社が何故にこうも従業員に対するビラ配布をおそれたのであろうか。ビラをもってかえるぐらいの自由はあたえるべきであろう。何か暗いベールにおおわれているような気がした。

われわれの道
—全国的サンジカリスト組織の結成をめざして—

〈註〉労働組合主義とサンジカリズムの異質性については、さしあたり「直接行動」第二号を参照

労働運動史にみる分裂の要因
—萩原晋太郎—

①

明治初期の労働運動の消長をみて、組織の失敗の主因は、労働者の意識の低さと財政問題にあったといえよう。前者の例をひこう。

一八八四年、池田竹次郎らは東京秀英舎で活版工組合の組織をはかり、懇談会をひらいた。だが、労働者は運動に恐れをいだき、また池田が私腹をこやすためにするのだと誤解するものがあり、池田は運動を進めることができなかった。五年後に跡部らが秀英舎の労働者を説いて、ようやく組合を作るまでになった。だが今度は他社の印刷工が党を組んで反対し、暴力沙汰に及び、この運動も挫折してしまった。

また一八八七年、小沢兄弟らが主となって鉄工懇談会を作った。だが会はしだいに乱れ、組合結成の下相談どころか会合者はバクチをやり、散会後州崎遊廓にくりこんで数日も居すわる者が続出する有様であった。小沢らは再出発をはかったが、労働者の妻たちの反対にあって、ついに流産してしまった。

つぎに後者の例をひこう。

一八八九年、鉄工同盟進工組が生れ、翌年活版印刷工同志会が結成された。いずれも前途有望にみえたが、会費に使途不明の点がある、また、幹部が積立金を使いこんだ、というようなことから内もめを生じて解散してしまった。

今日でも憎むべきダラ幹はあとを絶たないが、当時は思想問題以前に、一部幹部の金銭的無責任さが組織無用論をおこさせるものをなしていたのである。

②

なお、明治後期に入ると、別な意味での財政問題が生じている。

一八九七年に結成された労働組合期成会は、同年末一、二〇〇名、九八年末三、〇〇〇名、九九年五、七〇〇名と漸増した。鉄工組合も九八年末二、七一七名、一九〇〇年末五、四〇〇名に達したが、いずれも衰退してしまった。

日清戦争後の労働組合は共済活動に重点をおいていたので、これにひかれて入会する者が少なくなかった。この共済活動が組合の大きな財政的負担となった。

高野房太郎らが共済規約を作るさいに参考としたAFL組合の数字よりも、低賃金にあえぐ日本人労働者の疾病・死亡率がはるかに高く、救済金支出の尨大な赤字をきたした。会費納入者も減り、救済金の削減や経費の切りつめでは赤字を解消できなかったのである。

③

治安警察法（一九〇〇年）による官憲の弾圧、ブラックリストやスパイ政策による資本家の圧迫ははなはだしかった。これに対してアナキストをはじめとする社会主義者が、労働者の団結により処となる思想を吹きこんだ。だがこの芽がもえ出すのは大正時代に入ってからである。

日露戦争後の不況は、労働者を自衛のために自主的な闘いにたちあがらせた。一九〇七年は農商務省統計によれば、争議五七件、参加人員九、八五五名と明治年間の最高を示している。だが日刊平民新聞、大阪平民新聞、日本平民新聞、社会新聞の報じたストは、重複したものを除き一四九件に達している。実際にはこの数字をさらに上まわっていたであろう。門司、静岡県吉原、伊予今治の警察で巡査がストをおこしているほどである。

しかし、ストの昂揚は必ずしも労働者階級の自覚と戦闘化を意味するものではなかった。ほとんどのストが一企業内で自然発生的におこり、ストのための団結はスト終了とともに消滅した。一九〇八年にはストは激減し、かってのストの場所では労働者意識のはなはだしい低調さえみられた。

そして明治政府のでっちあげた大逆事件と大弾圧によって、社会主義運動は息の根をとめられた。ひ弱で底の浅い労働運動は一挙に暗い谷間に蹴落されたのである。

④

大逆事件の副産物として、政府は友愛会（のちの総同盟）を生みだした。これに対して「労働者の解放は労働者自身の手で」と叫んで天杉栄を中心とするアナキストがたちあがった。

大正年間における果敢な闘争の成果は、多くの史書が示している。

そしてアナキズムの影響はいわゆるアナ系組合に限定されるものではなく、友愛会内部にも圧倒的に力を占めていた。やがて一九二〇年に労働組合同盟会が結成された。労資協調をモットーとする友愛会のダラ幹は自己勢力の防衛に必死になり、翌年同盟会を脱退した。アナキストのけんめいな努力によって、労働組合全国総連合結成への道が築かれた。だが、これもついに結成大会で、中央集権支配を狙う総同盟派の陰謀によって分裂してしまった。

明治時代の分裂ないし破産と明らかにことなるのは、思想的対立が主因であることである。われわれをしていわせれば、政治屋とこれに結託するダラ幹が労働運動を破壊したのである。

⑤

全国のアナ系労組は一九二六年全国労働組合自由連合会を結成した。ところがこれは、アナルコサンジカリストと自称純正アナキストが対立し、一九二八年に分裂した。満洲事変、上海事変、五・一五事件、満洲建国と暗雲低迷し、反動思想がいちぢるしく抬頭した。

労働運動の右傾もはなはだしく愛国的団体があいついで生れ、世をあげて軍国主義の狂涛にまきこまれていった。

こうした情勢の中で、一九三四年、分裂していた自連・自協はようやく合同した。だが合同の時すでに遅く、すべての組合は衰退の一途をたどり、弾圧の嵐のもとに自連もついに倒れてしまった。

時の権力に対して常に卑屈にならされていた日本人民の悲劇であった。権力に追随する労働ボスが抵抗の組織を破壊して、戦争への地ならしをしたのである。

⑥

敗戦を迎え、日本人民は表面的な自由をあたえられて、労働運動は発展した。組織数において争議数において、まことに華やかである。だが質的にはどうか。

戦前の労働運動は帝国政府に保護されるもののみ安全に成長し、戦後の労働運動は米軍に公認されるもののみ成長した。

資本家や政党の紐つきボスが、日和見労働者を自己の支配下におくことに汲々としている労働運動の現状は説くもおろかだ。

実に容易に第二組合を結成する現象も、戦後の特長である。東宝や電産、その他のように四分五裂した例も少なくない。分裂させるものは誰か。今やその正体は明らかである。

労働者を解放するものは労働者自身の団結と行動しかありえない。

われわれは現存の中央集権組織を壊滅しボスを放逐し、自由連合組織による解放戦線の確立に闘かわねばならぬ。

▽……△
▽……△

笠原勉を偲ぶ

大正10年神戸の造船争議以来、サンジカリストとして、また登山家として、「勉さん」という呼名によって敬愛されていた笠原勉氏が8月6日突然亡くなられた。当社は同氏生前の知友にお願いし、その想い出を偲んでいただき、ささやかながら追悼の一端とした。

読経のあいだ

向井孝

通夜の夜、かっての同志宇治行忠師の、一時間あまりの読経のあいだ、ぼくは何度か、笠原さんの歌声をきいていた。

生前、GA例会がおわったあとなど、ぼくらが求めると、待っていたかのように、昔の革命歌やストライキの歌・詩や短歌を、はりのある美しい声で朗詠した。

おそらく故人ほど、それらのめずらしい歌のかずかずを記憶した者はもはやないだろう――そのくらいたくさんの歌詞が、心もち顔を上にむけ、かみしめるように眼をとじたくちびるから、つぎつぎに出て熄むことがなかった。そして、心から楽しそうだった。

その歌を、ぼくらがしいんと聞いていることが本当にうれしそうだった。

だがおもえば、ぼくらはあまりそのような機会をつくらず、その歌詞をも殆んど書きとめずにきき流してしまっただけであったのだ。

× × ×

いま現在のぼくらの運動は、実は明治・大正・昭和のはじめとつづいてきた無数の――いまは無名となってしまった先輩同志の悲しみや苦しみのなかでの闘いを土台として、かれらの流した涙と血の重みとともに存在している。

その生涯をかけて果してきた仕事が意味するものを、正しくうけとめ発展させ、明日の未来へ引継いでゆくことが、いまぼくらの一つの役割であるとすならば、歴史的な年月の波間のなかに、埋もれ消えてしまうものへの切実な顧慮――記録・保存・検討・継承――が、運動そのものの問題としても、常時もっとも重視されねばならないだろう。あとに残される者自身の問題として、自らに問わねばならぬ責任であるだろう。

ぼくは自らの責任として笠原さんに対して、そのことを果したか

× × ×

戦前からの運動者で、いまなおぼくらの仲間として会合に対等で出席してもらえる先輩は、もう神戸にほとんどいない。

『神戸を中心にした戦前のアナキズム運動――それを支えた数多くの同志の群像　出版された文献――活動の状況やエピソード』などを一どゆっくりききながらノートしたい、と思ったこともいまはもう空しく、どうしようもないことである。

安谷寛一のロンダ組（大・14）のことや月刊誌「黒斗」（昭・2）また、故人が中心になって刊行した「戦線同人」（昭・7）や「布引詩歌」（昭・8）など、ふとしたときに聞きとめた名前も、とうとうそのままになってしまった。

そしていまは、ただ……眼をとじるときこえてくる――あのうた声だけしか、ぼくらには残されていないのである。

昭和22年、佐竹良雄さんといっしょに姫路のぼくの家へ訪ねて来て、アナキズムを手ほどきしてくれた――そしてぼくが最初にあったアナキストが、笠原勉さんだった。ぼくに生涯をかけての方向をしめしてくれた、二人のひとが、ともにもう亡い。

『笠原君に殴り込みをかけられた話』

高橋利夫

山へ行けば何時でも逢える。そんな気易い思いから暫らく笠原君には無沙汰していた。人恋しい性分の僕には変な病気というか、世事に疲れて倦むと無精に親しい友達に逢いたくなる。そんな時、先ずうかんでくるのが手近の笠原君であった。八月の中頃であった。その病気の起きた時である。彼を誘い出して一夕、盃を交そうと彼の勤め先に電話した。僕がはじめて訃報を知ったのはその時である。瞬間受話器を耳にしたまま僕は絶句した。そしてその日一日、何としても承服し難い彼の死に僕はうわ言のように「笠原は死んだんだ」と呟きつづけた。

想えば笠原君との交遊は長い、僕の洋服の第一着は笠原君の兄さんの手になったし、その後の幾着かは彼の朗々たる短歌の朗声の中にできた筈である。季節は何時であったろうか、笠原君の結婚の祝福に故多田君とともに牛肉をブラ下げ、加納町の彼が二階借りしていた部屋を訪れて夜更けるまで新郎新婦の笠原君夫妻と鍋をつついて歓談したのも忘れ難い遥かな想い出である。以来四十年近く、逢えば酒を汲み交し、そして僕は酒席で必ずといってよく彼の朗声を彼に強いたものである。そんな交遊の中での唯一つの特異な話を書いてみよう。それが標題の話である。

アナルコサンジカリズムをめぐって、アナーキストの間で対立論争が起きた時がある。昭和八年頃だったと思う。当時僕は多田君が秋田へ帰農すべく去った後の神戸自由労働組合のその僅かな灯を絶やすまいとして、東神戸の一角に事務所を設けて腐心していた。その僕の耳に地元神戸でも、アナルコサンジカリズムを改良主義として純正アナーキズムを主張する芝原、笠原君らが多年の盟友でアナルコサンジカリズムを標榜して袂を分った佐竹君一派を憤激の余り襲撃するという情報が入った。

元来お人好しにできている僕のことである。何とかして同志相撃つの事態を避け、時間の経過を待って両者の間を取り持とうと考えた。

猶予がないので情報提供者の尾原君?にその足で連絡してもらって笠原君らの襲撃計画を佐竹君らに通報した。密告である。この密告の故か芝原君らの行動がうまく予期したように運ばなかった。

憤激が当然密告者の上に集ったものである。密告者の詮議が始った。先づ通報者の尾原君が芝原君らの手で制裁を受けたニュースが入ってきた。次は主犯の僕の方であろう。果して旬日をおいたある晩、われわれが事務所で会合を持っていると芝原君の一行がやって来た。しかし、格別何ということもなく一行は帰って行った。僕はこれで僕に関する限り不起訴処分になったものとして考えていると、その二、三日後である。笠原君が単身僕の家にやってきて「話があるから出ないか」という。僕は突差に「例の件だな」と直感した。と言うのは可愛いさ余ってというか、佐竹君に対する友情が人一倍強かっただけ笠原君にすれば腹に据えかねたものがあったに相違ないと想像していたからである。二人は連れ立って生田川に出、川に沿うて布引の方に向った。確か白絣の着物を纏って出たから夏だったろう。それも終わりに近いことと覚える。夜風に吹かれながら雑談を交していたが、互いに胸にわだかまりがあるから話がいつものようなペースに乗ってこない。そのうち暫く話題が途絶えたと思うと、少し改った口調で笠原君が僕に訊ねた。「佐竹君らに僕らの行動を事前に通報したのは君か?」と言う。矢張り笠原君当夜の訪問の目的は僕を密告者として吟味し、更には制裁を加えるつもりであったのだろう。だが吟味者としての厳しさ、険しさというか、その口吻態度には聊もそれは見受けられなかった。僕はホッとしてさり気なく白ばくれた。その件に関しては一切周知しないし、更には何者が僕を密告者だとして告発したのか……、と逆襲的に出た。〝窮鼠、猫を噛む〟の類である。賢明な笠原君には何もかも判っていたのだろう。それ以上は併し追求しなかった。既に難詰する機会を失ったというよりも、恐らく笠原君の持つ情味ある性情がそれまでの二人の雑談の間でそんな感情を雲散せしめたのだろうと思う。二人は深まった霽ぼい夜気の中を何時もと変らぬ会釈を交して別れた。

こう書き綴ってくると眼前に「そんなことも君、あったかなァ」と呟えるような冥界の笠原君の顔が泛ぶ。実に僕にとって今秋の堪え難い物の哀れというものである。（仲秋に寄せる）

作品抄

笠原勉

○昆虫の死を昆虫が喜んでいる、一匹の虫けらに集る大勢の虫けら
○はずみとはいえ子供に聞かれる事の悲しい父ははのあらそい
○いさかう度に思い深くなり所詮ひとりだと考へ考へ仕事をする
○ひとりぼっちのときちゃんは裏の陽だまりで石がけつむ人に話しかけている
○雨のためか、仕事がないからか、妻が寝込んでいるからか昼の焼酎
○着替えが乾かないのにぬれて帰る子供よ、歩けば足型のこして
○叱られることを覚えるのはいくつの頃か、夕暮の空に向って泣いている児よ
○今日の集りは如何だろう、ミシン踏み、夕焼けを眺めて

勉ちゃんと私

小松亀代吉

笠原君と最初に会ったのは大正の末か昭和の初めだったか、はっきりと記憶はしていないが、西下して黒闘社を訪れたのだから今から四十年以前であることは確かだ。南京街の汚ない豚饅頭屋へ連れて行ってくれたのも彼だったし、布引の山へ連れて行ってくれたのも勉ちゃんであった。

酔えばよく唄い、いつもニコニコと笑顔で迎えてくれたものであった。久保譲君の告別式の帰りぜひ娘の所へと誘われて夜おそくまでよく呑み、よく談ったのが彼と会った最後であった。その後、たびたび神戸へ来ないかとの誘いの手紙をもらいながらも、遂に行きそびれて会えずじまいに彼の死顔に花を捧げる結果となって誠に残念でしかたがない。

もう彼特有の関西弁もあの美声も再び聞くことはできぬ。あのにこやかな笑顔だけが瞼に残るのみ。

神戸を離れなかった笠原君

柳沢善衛

香櫨園の海水浴大会で私は検束されて、三ノ宮署に連れて行かれ、若い男と一緒に一夜なんきん虫になやまされたが、その時の青年が笠原君であったことを後になって知った。

当時、私達は須磨から歩いて神戸元町辺をぶらつき、パウリスタや平和楼を根城にしてよく飲んだが、勘定不足の時にはきまって彼が買って出てオトシマイ（借りの交渉）を引き受けてくれ、若いに似ずその交渉ぶりのあざやかさは誠に堂に入ったもので、われわれを感心させたものだった。また、秋のある日中西、和田、安谷笠原、中尾等の諸君とともに、六甲越えをして有馬温泉に行ったことがあったが、撒いた筈の尾行どもが山の中に先回りしていて乱闘となり、その時の彼の武勇伝は久しくわれわれの語り草になったものである。

こんなことがあって間もなく関西アナ（リャクをやった故?）と悪口をいわれた和田、安谷の両君を中心に私等は逐次神戸を離れて東京に出てしまったので、その後は彼にも親しく会う機会がなかった。こうしたことで彼の思い出でも既に三十数年の昔になってしまったが、今、彼の訃報をきいてその昔が一層懐しみを覚える。

さて私達が引き揚げた後も彼は一歩も神戸を離れず、その後芝原淳三君が殺される事件などもあって、この頃から同地の運動は急速に活潑化し、彼の指導活躍がみのって今日多くの同志が生れていることをきいている。慶すべきである。斯様に彼は同地に深く根をおろしていたことで実際に彼の功績は大きかった。

彼の死は今、阪神地方のクサビと支柱を失った感が深い、痛惜に堪えない。

君のまいた思想は生きている、そして残る同志はもえている、笠原君よ〝安堵して冥せよ〟と心から祈るものである。

黒色自由労働者組合
AC労働者連盟の思い出

横倉辰次

過日（九月七日）日特金属田無工場襲撃事件公判に傍聴すべく東京地裁に行き、青年アナキスト群の果敢な闘争行動を目撃して、往年を思い出した。青年達の年令は、いずれもAC労働者連盟員と同年輩である。

私は、その一人一人に往年の仲間のおもかげを思い泛べて、故旧の念に胸を熱くし、今更の如くいかなる時代でも叛逆運動は、青年の手で行なわれるものだと知らされた。

〈沢田一郎〉当時有名な浜松の楽器争議で、弾圧に抗して、組合旗の棹で（尖端が槍になっている）ポリ公のドテ腹を刺して、傷害罪で入獄、出獄してから、旧知の村上義博をたよって上京した快男子だ。沢田は、労働は搾取を肯定するものと嫌って就労を拒否、間もなく東京を去って行った。

〈秋本義一〉好青年であったが、少々吃るので言葉少なかったが、よく勉強していた。労働者にも略屋にもなりきれぬ自分の弱さを悩んでいたが、一見温和であったが、少年期に柔道を習得して、相当の腕前だった。黒色自由労働者組合員であれば就労できるので加入していた長沼という、狂暴で皆に怖れられていた獰猛な奴がいた。この長沼を思想上の行動で、秋本が咎め叱責した。それは魚藍坂下の共同便所脇きの箱香小屋の前であった。

長沼は理論的に話ると狂暴性を発揮して秋本に襲いかかったが、秋本は見事な跳腰で長沼を路面に叩きつけたが、長沼はガバと跳起きて、物凄い行相で再び組みついたが、また跳腰で、今度は便所のコンクリート塀に叩きつけると長沼は、ひき蛙のようにグチャリとなって、流石に降参した。

こんな際も秋本は少しも得意にならず、かえって恥かしそうに頬をポッと赤らめていた。AC労働者連盟員の殆んどが、生死不明だが、数年前に国電の有楽町のホームで、初老になった秋本を見かけたが、私は車内で発車寸前だったので話せなかった。

好漢秋本よ、健在なれだ。誰も知らない、忘れ去られた青年達の思い出を連記し誠に恐縮だ。この列伝を、今日でもアナキスト間で語り草になっている村上義博記で最後としよう。

〈村上義博〉は、私より一歳年長であった。前記の如くAC労働者連盟創立者の一人である。村上は決して理論家でもなければ雄弁家でもないが、革命家としての必要条件である、勇気で人間的魅力があり、拘擁力を持ち、若者を運動参加に誘いの雰囲気と才能の所有者だった。村上は、あらゆる労働者としての職場の経験を積んでいたが、この頃は、労働に意欲を失い、時折、「俺はアナキストかな」なんて嘆いていた。そして、アルツイ・パーシエフ著「労働者セリヨーフ」に共感を持ち「サーニン」に憧れていた。

「もし、サーニンニストというのがあれば、僕はそれかも知れんな」と自嘲していた。彼は自分が革命家としての路線からの脱落を自戒して、求めて前科者になった。罪名は、勿論、破廉恥罪でなく、公務執行妨害であった。検束しようとするパイ公を殴り倒したのだ。村上の鉄腕は定評があり、パイ公もポリどもにも恐怖を与えていた。一撃打倒のKOパンチを隻腕に秘めていた。

この鉄腕で屡々、狗共を打ちのめしてた為に村上は、捕えられて、狂人として松沢精神病院に投獄的入院を強いられた。

正常な人間の気狂病院暮しは、その精神を狂わすものだ、村上義博の後半生は常人と狂人との交差であった。

村上を入院させる理由として創造された病名「拘禁来痴呆症」がそれ以後、幾多の革命的労働者や自由人に冠せられて、拘束の理由にされた。

半狂人の村上義博は、長い日本の暗黒時代を放浪の中に生き長らえて、昭和廿年の敗戦と同時に東京に現われて、日本アナキスト連盟再建に参加し、巷に逃避していた私を激励してアナキストの戦列に誘導したのは半狂人の村上義博であった。

一九四六年五月、芝日本赤十字会館での第一回全国アナキストの集会に村上は、私と腕を組んで出席した。その後の新橋のアナキスト連盟事務所にも屡々顔を見せていたが、一部彼を狂人扱いする同志や敗戦後の激変に伍してゆけず、東京から友って行った。

その後、京都の病院で客死したとも北海道の雪中に窮死したともいわれているが、確かな消息を知る者は同志間にもいない。（続く）